曽我の雨
鎌倉殿を守った五郎丸と野牛島（やごしま）の伝承

※1

刀を抜き、闇の奥に鎌倉殿を目指す曽我五郎時致（ときむね）、薄衣を羽織り一瞬の隙をうかがう五郎丸。浮世絵師右田年英（みぎたとしひで）が描いた曽我兄弟仇討の一場面です。

旧暦5月28日の雨が強く降り続く闇夜の中、源頼朝が開いた富士の巻狩（※2）に参加していた幕府の重臣工藤祐経（すけつね）が22歳と20歳の曽我兄弟に討たれました。兄弟の名前は兄十郎祐成（すけなり）と弟五郎時致。それぞれが5歳と3歳の時、伊豆の所領争いで父が同族の工藤祐経に殺されたため、兄弟は仇討ちを固く誓い、成長してこの日を迎えたのです。後に「曽我の雨」と呼ばれた雨の中、夜陰に紛れ宿となった屋形に忍び込み本懐を遂げた兄弟は、最後に鎌倉殿と呼ばれた源頼朝の御前を目指しました。多くの御家人に行く手を阻まれ兄祐成は命を落としますが、弟時致は後に「十番斬り」と称されたように多数の武将を斬り倒し頼朝の目前までせまりました。その時薄衣を纏って女性を装い、時致の油断を誘って後ろから取り押さえたのが頼朝の側で仕えていた小舎人童（※3）、若干18歳の五郎丸です。

曽我兄弟と工藤祐経
曽我物語図会　歌川広重
弘化年間（1844-47）正眼寺蔵

曽我物語真名本（※4）によれば五郎丸は京に生まれ、16歳で飾匠の仇を討ち京を離れました。甲斐源氏の一条忠頼に身を寄せ、忠頼が頼朝に討たれた後は鎌倉に移り、頼朝に仕えます。荒馬を乗りこなす七十五人力の強者と伝えられます。

鎌倉殿を守った五郎丸ですが、その後吾妻鏡や曽我物語には名前が見えず、どのような人生を辿ったのか不明です。一方、野牛島の伝承では薄衣を纏い女性を装ったことが咎められ、この地に流されたと伝えられています。野牛島には五郎丸の墓が現在でも祀られ、近年まで観音堂も建てられていました。お墓の傍らにあるビャクシンは五郎丸が地面に突いた杖が成長したという逸話も残され、近隣の家系は五郎丸の家来の子孫とも伝えられています。野牛島に流されたことが史実かはわかりませんが、五郎丸が一時身を寄せたと言われる一条忠頼勢力下の甘利荘と野牛島は隣接しており、ゆかりの土地であったことは確かです。また仇討翌日鎌倉殿の面前で行われた時致の裁判では、有力な御家人として小笠原長清が同席していたことからも鎌倉とこの地の甲斐源氏との強い繋がりがうかがえます。

御所五郎丸の墓　野牛島

野牛島のビャクシン

曽我兄弟の仇討ちが行われた5月に降る雨は「虎が雨」とも呼ばれ俳句の季語にもなっています。兄祐成の恋人虎御前が兄弟の死を悼み流した涙に例えられたのです。甲斐国では虎御前は芦安安通（あんつう）生まれとの伝承も残されています。

曽我物語は江戸時代、さまざまな脚色が加えられながら能や歌舞伎、浮世絵の題材になるなど人気を博しました。そのクライマックス、時致を五郎丸が捕らえる場面は東洲斎写楽をはじめとするさまざまな浮世絵師に描かれ、彩られた五郎丸の姿を私たちに伝えています。

文／写真　文化財課

※1：「時致鎌倉殿ノ狩屋ヲ騒ス」部分　年英（としひで）明治24年（1981）　国立国会図書館蔵
※2：富士の巻狩（ふじのまきがり）は建久4年（1193年）5月に源頼朝が富士の裾野で行った大規模な巻狩。野生の獣を四方から追いつめて射止める狩りで、大勢の御家人が参加し、将軍頼朝の権威を誇示するものでもあった
※3：小舎人童（こどねりわらわ）は身分の高い人の身辺に仕え、雑用をつとめた少年
※4：曽我物語は詳。鎌倉末期から室町前期に成立。曽我兄弟が富士の巻狩で父の仇である工藤祐経を討つまでを作品。真名本（まなほん）と仮名本（かなほん）があり、真名本の方が古い形式